

はぬを禮とする事尤なる事なり、

〔一話一言 二十一〕煙草盆古器

津侯藤堂氏の家に、古き煙草盆あり、高虎君の比のもの也とぞ、松板にかな釘を打てつくれる也と、清末侯毛利讃州の話なり、

〔續五元集下〕元祿十三年

出し入やすきはやみちの錢

まぎれずに返す芝居のたばこ盆

晉子

〔扁額軌範二編附錄〕船の圖 清水寺奥院

寛永十一年末吉船本客衆中とあり、北村忠兵衛畫、○圖 爰に圖する所は、寛永十一年の圖にて、

○中 多葉粉盆の中に、木の眞中に穴を鑿きせるを通せる圖あり、今斯の如き事を爲さず、させるの轉ばざるためか、元祿年間、千宗佐號仙叟が好に、吸口の方に輪をはめたるあり、こは吸口の疊に付ざる爲に造るとぞ、古へは客あれば、必多葉粉盆にたばこ烟管を添出し、茶に次てこれを勸む、客夫を取て吞し也、今の如く、させる多葉粉入を、自ら持歩行し事はあらず、

〔玉川砂利〕烏丸亞相光廣卿は、扇箱三本入とし給ひ、徂徠先生は、烟草盆と硯箱と一つなりしなど、きくも有がたし、

〔煙草考〕煙爐

俗謂火入也、以貯火、大小高低方圓不一、其製有銀鍮唐金及瓷器等之異也、宜稍大者、以能貯火、久之不滅也、其小者不堪養火也、

〔好色二代男三〕敵無しの花軍

一夜阿波座の東南側のまがきに、○中 松屋町焼の土火入に、反そわん碗の莢入、取集めたる鍍金煙管片